

次世代を担う青少年と ともに進めるユネスコ活動

～地域のユネスコ協会に、青年の活躍の場を作るために～

はじめに

民間ユネスコ運動が始まって、60余年が過ぎました。2015年には、UNESCO創設70周年を迎えます。私たちが民間の立場で、人類共通の課題について世界の人々と語り、協力していくことの重要性は、ますます大きくなっています。

この伝統を受け継ぎ、次世代につなぐため、日ユ協連では青少年ユネスコ活動の活性化を重点課題として推進します。一人でも多くの青少年に、民間ユネスコ活動の“たすき”をつなげましょう！

日本ユネスコ協会連盟 青少年・ボランティア委員会（*）一同

～日ユ協連理事会における青年ユネスコ活動に関する議論の経緯～

2012年度

「民間ユネスコ運動の今後の発展に向けて」

（2012年機関誌ユネスコ10月号付録）

「青年ユネスコ活動支援方針」（巻末/第486理事会承認）

2013年度

青少年・ボランティア委員会

「方針」の構想の具体化

（本資料作成と14年度以降の事業提案）

2014年度～

青年リーダーの養成をめざした展開（第494回理事会承認）

青少年ユネスコ活動助成

ユネスコ協会だけでなく、青年会員自身が申請できる助成枠ができました。

ユネスコ全国子どもキャンプ

平和の心を育てる野外活動という趣旨に加え、ESDの実践の場と位置づけます。

青年スタッフには、将来の地域ユネスコ活動を担うリーダーとしての成長の場になります。

青年研修派遣

青年会員を国内外の研修や国際会議に派遣します。

青年情報交換会

青年理事・評議員を中心に、青年事業の評価、次年度以降の事業構築を検討する会合を行います。

CASE 1



青年会員ゼロからの青年部立ち上げ ～(特活)市川市ユネスコ協会の場合～

「時間をかけて、粘り強く。」が信念。地域の青少年がユネスコ活動を通じて成長する姿が喜びに。

時 期	市川市ユネスコ協会の動き	青少年会員	その他
1992年 (1年目) 手さぐり期	教育委員会を通して学校へ「書きそんじはがき回収」のお願い 公立小中学校56校訪問、約30校の協力 学校が参加可能な国際交流事業への勧誘 学校で外国人への生活紹介ビデオ作成。ベトナム教育省、JICA受託事業 などで外国人と児童・生徒の交流を作る。	0人 (イベントへの単発参加)	
1999年 (7年後) 土台作り期	ブロック研究会にて「青年討論会」企画。 親コが青年の集まる機会を作り、青年の役割分担を明確にした上で、参加・協力を呼びかけた。	会員の家族(学生中心) 千葉大学学生・留学生、近隣のユ協青年部(日ユ協連の各種会議・イベントで知り合いに)が協力者として参加。	関東ブロック 研究会 in 市川 第56回 全国大会 in 千葉
2000年 (8年後) 青年を生かす時期	全国大会にて留学生を中心とした「国際交流ブース」実施。 親コ=裏方、青年=企画・準備・司会進行		
2001-2006年 (9-14年後) 後方支援期	市川市ユネスコ協会青年部設立 年間スケジュールに青年対象の事業を盛り込み、役割分担の中で青年部会員の能力を生かす。 事業例：サイエンススクール、訪問学習(福島第二原発、京都世界遺産等)。親コ行事「街頭募金」「平和の鐘」「音楽祭」「絵画展」への手伝いにも青年が参加。	青年会員約10人 「自ら考え、自ら動く」会員へ成長。 卒業等による退会者が出る一方、社会人になっても残る人も出た。	日ユ協連主催事業 (ネパール・スタディーツアー)に 2名派遣
2007年 (15年後) 連携期	青年部による「小学校出前授業」(試験的に)開始 学校との定期的な事業立ち上げを目指して、会員の中の教員経験者を通じて交渉し実現。学校側の要望に沿いつつも、「ユネスコの話」の時間確保を重視。 親コ=企画・立案、青年=参加。 親コ会員は、必然的に会合の日程を週末や夜間に合わせる。	青年会員約20人 構想当初から青年会員が企画に参加。 参加青年は回を重ねるたびに成長し、小学生に寄り添いながら、活動を楽しめるようになっていった。	推進員研修 (市川市ユ協から 2名派遣)
2007-14年 (約20年後)	青年部が年間計画作成 親コの企画や他団体の活動に沿って、青年部が柔軟に事業を企画。 ★青年部が企画し、親コ会員が他団体への講師依頼など渉外にあたることで、新しい連携のきっかけになる。(企画は青年、交渉は親コという協力体制。)	青年会員約30人 青少年参加者 約100人 青年部が「活動の成果」も視野に入れるようになる。	2009年 市川市にUS誕生
2014年～ (今後) 共に新しい課題に取り組む関係へ。	より公益性を求め、特定非営利活動法人へ。 参加児童減少に伴い、学校の先生を講師に招くなど新たな方法を模索。 ・USとの連携のための試みを続ける。 ・学校が市川市ユ協の事業に参加することで、新たな連携が生まれる。学校がUS加盟のメリットを見出すことを期待。	US加盟校の高校生を中心に、未加盟校の生徒とともに、企画・立案・実施。	市内のUS7校に。 US加盟校にボランティア部が誕生。ユネスコ活動に参加。

表記一覧

「日本ユネスコ協会連盟」 = 日ユ協連

「ユネスコスクール」 = US

「スタディーツアー」 = ST

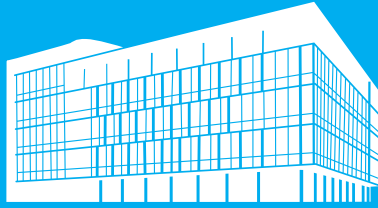
CASE2



地域ユ協と教育委員会の連携から ～岩国ユネスコ協会高校部の場合～

時 期	岩国ユネスコ協会の動き	高校の動き	その他
1960年代～	市教育委員会に岩国ユネスコ協会事務局を置き、設立当初から行政と協力しながら一体となって、地域に密着したユネスコ活動を展開。	各高校に「岩国ユネスコ協会高校部」担当教員がつく。	防府市に「ユネスコ協同学校」1校
	「岩国ユネスコ協会高校部」主な活動内容 書きそんじはがき回収運動、農山村地域でのボランティア活動、街頭募金、施設訪問、研修会開催、異文化交流会、高校生討論会など 担当教員の異動や取り組み方の違いによって、活動の度合いが変わるという現実もあるが、すべての高校が加入していることのおかげで、いつもどこか複数の学校が熱心に活動している状態を維持してこることができた。	「岩国ユネスコ協会高校部」としての全体的な活動は年間約5回。 各高校単独では、「ユネスコ部」「ボランティア部」「生徒会」等としてそれぞれに活動。	
2011年	山口県ユネスコ協会連盟の県大会を引き受け、事務局を含め会員全員で取り組む。	高校部員は、記念講演会の司会進行、式典受付係を担当。	周南市に新たなUS誕生。
2012年	日ユ協連主催「ユネスコ全国子どもキャンプ in 岩国」受入。 青年スタッフとして、山口や広島に移動した高校部OBを呼び寄せて活動することができた。その他近隣の大学・短大の学生や市役所等の社会人からもスタッフとして協力を得る 12月：四国・九州の青年との交流会に8名参加。 3月：青年全国大会（全国的青年連絡組織主催）に2名参加。	高校部から青年スタッフとして9名（内実行委員4名）参加。	岩国市内にUS誕生。
2013年	8月：「ユネスコ全国子どもキャンプ in 東京」へ青年スタッフ4名、児童11名、引率者（親ユ）1名が参加。 12月：四国・九州の青年との交流会に12名参加。 3月：青年全国大会に2名参加	高校部から青年スタッフとして10名参加。	キャンプスタッフを軸にユネスコ協会内に青年部再スタート
2014年	高校部参加校<現在> 高水高校、 岩国高校、 岩国総合高校、 岩国商業高校、岩国工業高校、 高森高校	5校 約50人	青年部活動開始
課 題	卒業後の高校部会員のフォロー 市内には短大はあるが大学がない。卒業生はほぼ地域を離れてしまうため、学校との連携はしやすい一方、より幅広い層の若者を取り込んで「青年部」となることが難しい。		
現在の取り組み	毎年4月に、高校顧問教諭、岩国ユネスコ協会、それに事務局（＝市教育委員会）とで連絡協議会（会場市役所）を開催し、各校が主になって担当する活動を決定する。各活動にはすべての高校が参加することが原則。 活動面：特徴として、生徒が喜んで参加し、その後の活動に力が入るのは、外部から刺激を受けた時。他のユネスコ協会の青年と一緒に活動する機会や、校外に出られる農山村地域のボランティア活動等では生徒の動きは大変活発であり、これからも大切にしていきたい。 費用面：岩国ユネスコ協会予算の中に高校部活動費を計上し、活動を支援している。その他青少年育成の寄付などがあり、それらを充当しているが、活動が活発化すればするほど、高校生が大会、研修会に出席する場合は、一部自己負担（参加費など）となる場合が出てくる。 その他：ユネスコ協会の県大会、青年部の活動などには、市のバスを無料で提供してもらっており、行政の支援で大変参加しやすい状況にある。		

CASE 3



大学ユネスコクラブとの連携からの発展 ～石川県ユネスコ協会青年部の場合～

時 期	石川県ユネスコ協会・同青年部の動き	青年部会員	その他
1948年 (昭和23年) 1991年	「金沢ユネスコ協力会」として地方紙社長の発意で発足。 一時期、休眠状態だった石川ユネスコ協会を再発足する。 ※日ユ協連・県国際文化交流センター北陸放送等の支援で再興する。	0名 0名	
1993年 1997年 1999年・2008年	カンボジア内戦後の1993年・バタンバンに当協会初の寺子屋を共同建設 (ペルーマーク他)・・・その後も紛争続く。 中国朱鷺の生息地の教育環境整備のため机・椅子を贈る。 さらにベトナムとカンボジアに寺子屋を建設。	高校部員は、記念講演会の司会進行、 式典受付係を担当。	
1992年 基礎作り期 1998年	K理事の転職先の金沢女子大学(現金沢学院大学)に異文化研究サークル誕生。 この後、学生の自主的呼びかけにより県内の各大学に学生会員の和が広がる。 複数の大学に拡大したサークル KICA(Kanazawa Inter-Cultural Assoc.)が、県ユ 協の青年部に正式に位置づけられる。	1大学3名からスタート 3大学10	その後、学生の自主 的呼びかけにより県 内の各大学に学生会 員の輪が広がる。
1990年代 日ユ協連事業活用	県内の学生対象の各種国際イベントに参加しつつ、日ユ協連主催コースセミナー、 国際子どもキャンプ、ソウル・ユネスコキャンプ等にも積極的に参加する。	大学生の中のリーダー的存在が育つ。	1994年日ユ協連ST 1998・1999韓国 キャンプ
2000年 寺子屋訪問	ベトナムの寺子屋完成にあわせて県ユネスコ協会第1回スタディー・ツアー(以 降STと表記)を実施。日程の一部を、青年部独自のプログラムとして企画。	25名参加、 内青年部は3大学7名	ホーチミン市に寺子 屋建設支援
2001年～ STを柱に青年 増・組織力強化 2008年カンボジア に寺子屋新設	2回目以降は学生たちが自主的にSTの計画(約2週間、ベトナムとカン ボジア)を立案し、青年部主体の中心事業として成長、ユネスコ活動参加 への求心力となっている。 ・初めての学生には、「ユネスコ活動」よりも「国際交流」「海外支援」の方 が伝わる。 ・親ユ=主催者、学生=企画・実施 ・STは(一部の補助金を除き)基本的に参加者負担のため、企画段階から 安く抑える配慮がされている。	2回目7大学28名、 3回目5大学25名。 これまでに15回のST を実施、延べ217名が参加。卒業 後、全国の各方面で活躍している。	2008年カンボジア・ シエムレアップに寺 子屋新設 2009～金沢市を中 心にUS増。
2004年 ～現在 学生主体の事業 企画・運営	STを生かし、小学校への出前授業や、国際交流祭への出店、寺子屋支援の ための文具集め、年複数回の東北被災地支援、大学祭や県民向けのユネス コ普及活動:護美(清掃)活動、その他の事業を展開。	現在の青年部員20	2014.3現在、US県 内加盟校数 小学校48・中学校 11・高専1
課 題	1 現在、金沢大学の学生が中心となりつつある構成員を、いかに他の大学に広げて行くか。 2 青年部OB,OGの組織化・関係促進。 3 高齢化のすすむ親ユとの関係強化・コミュニケーションの促進。 4 支援した現地NGOの継続・発展をどう図るか		

CASE 4



大学ユネスコクラブの構成団体会員化

～玉川大学ユネスコクラブの場合～

時 期	玉川大学ユネスコクラブの動き	その他
2003年	K顧問が玉川大学教育学部に赴任。 国際理解教育のための課外活動を活性化し、「グローバル人材育成」をクラブ活動で実践するための自主勉強会のサークルとして「玉川大学ユネスコサークル」を立ち上げる。	
2005年	玉川大学公認の文化会「玉川大学ユネスコクラブ」となる。 「将来、学校現場でESDを教えられる人材の育成」を活動目標に掲げる。 日本国際理解教育学会第15回研究大会にてESD国際シンポジウム「持続可能な開発のための国際理解教育環境および多文化との共生にむけて」にUNESCO本部職員（ハダッド部長、ヒゴツツイ部長）を講師に迎えて開催。 ユネスコクラブ部員がファシリテーターを務める。 UNESCO本部にSTを行い、松浦事務局長との懇談学習会を実施。 日ユ協連主催インドSTへ玉川大学ユネスコクラブの部員1名参加。	国連ESDの10年開始
2008年	10月 玉川大学教育学部がUS加盟校として登録。 11月 ユネスコスクール支援大学間ネットワーク（ASPUnivNet）に加盟。	
2012年	日ユ協連の構成団体会員として加盟承認を受ける。 東京都ユネスコ連絡協議会に加盟、理事会などに参加。	
2013年	東京都ユネスコ連絡協議会勉強会、ユネスコ・アルムニクラブ、慶応大学ユネスコクラブ、ICUユネスコクラブとの交流会などに積極的に参加。 「第8回ユネスコ・ユースフォーラム」（UNESCO本部）に部員1名が文部科学省の推薦を受け日本の青年代表として参加。玉川大学より最優秀学生として表彰される。 11月30日 文部科学省委託事業「日本／ユネスコパートナーシップ事業」として、玉川大学にて「ユネスコクラブ全国サミット」を開催。青年による「共同声明」を採択。	第5回ユネスコスクール全国大会（多摩市）のサイドイベントを主催
課 題	1) 構成団体会員に入っていない、他大学ユネスコクラブとのネットワークづくり。 2) 近隣地域のUSとの連携強化（実習、出前授業、ESDワークショップなど） 3) 海外のユネスコクラブとの交流の促進（とくに日中韓の大学ユネスコ学生間の交流を！）	
今後の取り組み	1) 「ユネスコクラブ全国サミット」にはじまる大学ユネスコクラブの全国的ネットワークの構築に向けた大学間交流の促進（奈良教育大学ユネスコクラブとの交流会、北海道教育大学ユネスコクラブとの合同合宿、ICUユネスコクラブ・慶応大学ユネスコクラブとの合同学習会等） 2) 教師教育の視点から、ユネスコクラブと近隣地域のUSとの連携強化をめざし、多摩市、稲城市、横浜市等のUSと連携したユネスコ活動を展開している。	

■地域ユ協との連携について Q & A ■

Q. 大学ユネスコクラブの活動の中で、地域ユ協の活動につながる可能性のあるものは何ですか？

A. 留学生との交流会（弁論大会、互いの文化紹介など）や、地域のUSへの教育支援活動（出前授業や子供キャンプ、ESDセミナー開催）など。

Q. 青年のいない地域ユネスコ協会がもつ、大学や高校ユネスコクラブにとって魅力ある活動とは？

A. その地域の文化遺産や伝統芸能等について、児童生徒・学生たちのために出前授業をしたり、あるいは地域文化紹介のイベントを開催することは、青年のいないユネスコ協会が学生クラブにとって魅力のある活動を提供できる大きなチャンスかと思えます。生徒や学生たちが必ずしもよく知らない地域遺産をもっと活用することを考えられてはいかがでしょうか？

2014年2月、当クラブが奈良でSTを行った際、奈良の寺院や伝統工芸の工房での専門家の話に学生たちは非常に真剣に耳を傾けていました。地域ユネスコ協会が、地域遺産をはじめ「文化」の価値を青年たちに上手に伝えることができれば、青年たちは必ず寄ってきます。

事例から見える！ 次世代とともにユネスコ活動を 盛り上げるヒント

世界

合言葉は「(大人も若者も)世界に役立つ人材になろう」。

ユネスコに関心を持つ若者は、国際交流や国際理解教育活動に素朴な興味や意欲を持っています。
STや留学生等との交流機会を、ユネスコならではのつながりを生かして持つことから始めてみましょう。

寄り添い

学校での学びや活動を尊重し、地域に実践・交流の場を作る。

出会い

「知的・精神的連帯」の場づくりを積極的に。

会員の青年 × 留学生・近隣ユ協青年部・出前授業先の小学生・市内US児童生徒/先生方
親古(関係者の大人) × 企画に関わるリーダー的青年(若者)
若者 × 伝統文化や豊かな自然環境など本物に触れる機会・専門家である地域NPOや市民

持続

「継続は力なり」。時間をかけて粘り強く「続ける」ことが不可欠です！

参 考 公益社団法人日本ユネスコ協会連盟「青少年ユネスコ活動支援方針」(基本方針) 2012年度策定

日本ユネスコ協会連盟は、ユネスコ憲章の理念に基づき、教育・科学・文化を通じて平和で持続可能な社会をつくるために、次世代を担う青少年に対して、主体的な行動をするための支援を行う。

青少年に対してユネスコ理念の普及に努め、日本ならびに世界の課題解決のためのユネスコ活動への参加機会を増やす。平和で持続可能な社会を支える人材を養成し、それを通じて地域のユネスコ活動の活性化を図る。

各地域ユネスコ協会が、時代のニーズに応じた青少年ユネスコ活動に取り組めるよう支援する。

また、青少年がユネスコ活動をととして、以下の“力(意欲と能力)”を身につけられるよう、事業を構築する。

その“チカラ”とは、以下の4つである。

- ・地域から世界に至る多様な問題を捉える認識力
- ・問題を解決するための提案力と行動力、推進力
- ・コミュニケーション力(多くの人々と協働するための)
- ・ユネスコの理念と活動指針を理解する知識力

発行者: 日本ユネスコ協会連盟 青少年・ボランティア委員会(2013年度理事会)
委員長 松波孝之(理事)
委員 安達仁美(青年理事)、石川郁香(青年評議員)、石川航(青年評議員)
岡田茂(理事)、吉崎晴子(評議員)
日本ユネスコ協会連盟組織部 青少年・ボランティア委員会担当(長倉・穴戸)

お問い合わせ: TEL: 03-5424-1121